2. 納骨堂を中心とする新しい死と生の空間の生成

1. 信仰の実践空間としての納骨堂

韓国では、朝鮮時代、儒教が国家の統治理念として採択されて以来、支配階層の厳しい政策の下、葬祭も儒教礼法に沿って一律的に行われるようになり、貧しい下層民を除いては先山を積極的に造成するようになった。先山は長い間、祖先への孝と礼を尽くす儒教理念の実践の場として、一族の結束と紐帯の象徴として機能してきた。したがって、以前は死者や遺族がキリスト教、仏教など他の宗教を持っているとしても、門中所有の先山がすでにある場合は、生前に死者の遺言があったなど特別な場合でなければ、旧来の伝統に従うという立場から死者を他の祖先と一緒に先山に葬ることが多かった。しかし、人口の都市集中、親族共同体の弱化、地価の上昇などの様々な要因により、先山の維持と管理、あるいは新しい先山の確保と利用が困難になった人々のなかには、代案として火葬を選択する人も増えている。先山がその機能を失うにつれ、先山の制約を受けない多様な選択肢を持つようになった人々は、カトリック、プロテスタント、仏教、円仏教など、自分たちの宗教に応じて葬祭を行い墓を作ることに、より積極的に取り組むようになった。とくに大都市とその周辺部の納骨堂は、死者や遺族が自分たちの信仰を表現・実践するための有効な場として機能している。それは納骨堂が従来の埋葬墓地に比べて死者や遺族の信仰を表現・実践するにあたってより有利な条件を持っているためである。

1. 宗教団体の運営する納骨堂

死者と遺族はまず自分の宗教と関連した宗教団体が運営する納骨堂を選択することで自分の信仰を表現・実践することができる。2010 年には、全国の 309 箇所の納骨施設のうち、公営施設は 128 箇所、法人施設（民営業者）は 54 箇所、そして宗教団体の納骨施設は 127 箇所にまで達した[27]。民営業者が遺骨 500 基以上を安置できる納骨堂を運営するためには財団法人を設立

図 12　仏教寺院の納骨堂とカトリック教会の納骨堂

しなければならない。だが、宗教団体の場合、既存の施設を活用して信者のための小規模の納骨施設を造成することが許容されており、財団設立の義務を免除されるなど規制も厳しくないため、現在、宗教団体が運営する納骨堂は急速に増加しつつある。

宗教団体の納骨堂では、普通聖職者と信徒会が葬儀の全過程に関与し、それぞれの宗教の礼法に従って儀礼を執り行う。そして聖職者によって毎日、あるいは定期的に追悼儀式が行われる。宗教団体の納骨堂は、遺族が日頃から利用していた宗教施設に付属して設けられることが多いため、親近感、信頼感、安心感を抱きやすく、信仰生活のために宗教施設を訪問する度に納骨堂に寄って故人を追慕することができるため、好評を得ている。(図 12 を参照)

図 13　民営納骨堂のキリスト教専用館とキリスト教安置室

2. 民営納骨堂の宗教別安置室

次に、死者や遺族の宗教に従って、民営業者が運営する納骨堂の各宗教別安置室を利用することもできる。京畿道城南市盆唐区にあるS納骨堂にはプロテスタント、カトリック、仏教安置室がそれぞれ設けられており、京畿道高陽市一山東区にあるC納骨堂にはキリスト教専用館が設けられている。これに限らず、多くの民営納骨堂が、一般の安置室の他に宗教別安置室を設置し、宗教別の儀礼空間と備品を備えており、それぞれの宗教に従って納骨儀式や追慕儀式を行うことができるようにしている。(図 13 を参照)

3. 安置壇内の宗教関連物品

一方、宗教団体が運営する納骨堂や民営業者が運営する納骨堂の宗教別安置室を選択しなくても、安置壇を宗教関連物品で飾ることで、死者や遺族の信仰を表現することができる。実際、筆者が見学した多くの公営・民営納骨堂でも、半分近い安置壇で、骨壷や位牌に刻まれた宗教のマーク、十字架、マリア像、仏経、お守りなど様々な宗教関連物品によって死者や遺族の宗教が表現されていた。(図 14 を参照)

このように、納骨堂の場合、死者や遺族の信仰を表現・実践するにあたって、従来の埋葬墓地に比べてより明瞭で多様な方法を使うことができる。

最近、イギリスや日本などでは、葬祭儀礼において宗教的な色合いを排除

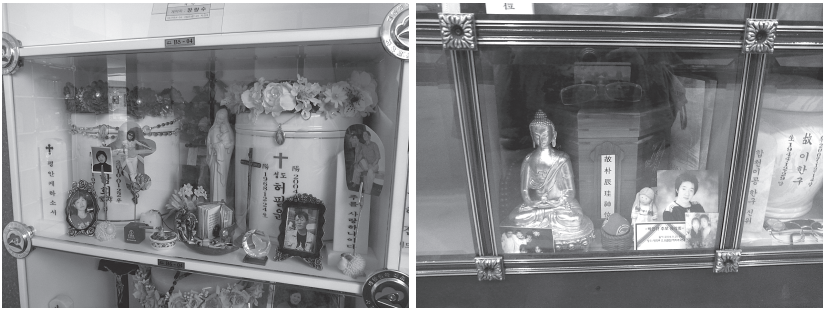

図 14　安置壇内の宗教関連物品（カトリック、仏教）

する事例が増えつつあるという。しかし、韓国の場合、宗教的な色合いがむしろより鮮明になっているような印象を受ける。それは、長い間「伝統」という名のもとで、儒礼による葬儀と先山から自由になることができなかった人々が、今は葬儀と墓地の形を選ぶことにおいて、より自由で幅広い選択をすることが可能になり、その過程で死者の個性、信念、ライフスタイルと直結する信仰もさらに積極的に表現されるようになったためではないだろうか。また、従来、親族共同体や地域共同体によって 1 つ 1 つ意味を込め、意味を熟知して行われていた伝統的な儒教式葬儀の形式と意味が子孫にきちんと継承されず、見知らぬ葬祭専門業者によって形式中心にリードされることが多い現状において、日頃から見慣れた聖職者と信徒会によって厳粛で分かりやすく執り行われる葬儀の方が、より信頼感と安心感を与えるためではないだろうか。さらに、従来の葬儀において最も重要なサポート組織であった親族共同体と地域共同体が、社会変動に伴ってその機能をきちんと果たせなくなったため、それらに代わって信仰を共にする信仰共同体が選ばれ、また、死者と遺族に安心感、所属感、紐帯感を与えていた一族の先山に代わって、信仰共同体の運営する集団墓地が選ばれているのではないだろうか。

2. 死の教育空間としての納骨堂

墓地は死の教育の場所でもある。とくに都市部の新しい墓地として広まりつつある納骨堂の場合、その役割と機能がより強まったと考えられる。

納骨堂を訪れる人々は、自らの墓参りの対象だけでなく他の安置壇の写真、遺品、メッセージを見て回る人が多い。故人たちの生前の生活を思わせる写真と遺品、そして彼らを思い慕う人々のメッセージは、第三者にも共感をもたらし、自然に自分の死について考えさせる。

一例として、家族と一緒に祖母の墓参りに訪れ、他の安置室を見て回り、ある死者の母が残したメッセージを読みながら泣いていた女子高生は、次のように話した。[28]

> 「(故人たちの中に) 私より年下の人がとても多かったので、びっくりしました。とても可哀想です。……死ぬことについてあまり考えたことなかったんですけど、ここに来て他の人々の写真や手紙を見ると、自分も明日にでもすぐに死ぬかもしれない……、私の墓には誰が来てくれるだろう、誰が一番悲しんでくれるだろう……、そんなことを考えました。(……) 母が一番悲しむと思います」

韓国の従来の埋葬墓地に比べて大都市とその周辺部の納骨堂は、死者の生前の人生を思わせる装置が多い。安置壇に飾られた写真、遺品、メッセージは、それを見る人にとってその中の骨壷を、埋葬墓地の墓と墓碑のように自分と何の関係もない冷たい無機質な存在としてではなく、ついこの前まで自分と同じように生きていて他の人と関係を結びながら生活していた個性のある人格として感じさせる。そして骨壷の中の死者と自分の立場を置き換えて考えさせる。このように納骨堂は、普段死についてあまり考えていなかった人々や、死を他人事のように思っていた人々、死を怖がってタブー視していた人々に、死について考える機会を与えている。(図 15 を参照)

このような納骨堂の長所を生かして、より積極的に意図的に死の教育に携

図 15　埋葬墓地と納骨堂の風景の比較

わろうとする納骨堂もある。

例えば、円仏教が運営する全羅北道益山市の納骨堂では一般人を対象に「死の体験プログラム」を実施している。死の体験プログラムは、死の準備（納骨堂の施設を見学し責任者である聖職者が死について講演をする）、瞑想体験（暗い空間で自分の名前が書かれた骨壷を前に自分の死を想像する）、遺言状の作成と朗読（暗い空間でロウソクを前に自分の遺言状を書く）、入棺体験（発泡スチロールで作られた仮の棺に入る）、死の道の体験（真っ黒で何も見えないところを手の感覚のみに頼って通り抜ける）、感想文の作成と発表（参加者たちが体験後の感想を語り合う）の手順で行われる。このプログラムの目的は参加者に仮想の死を体験させることで現在の生をより幸せに生きられるようにし、死というものが怖いものではなく、生の一部分だということを認識させることだという。納骨堂の利用者や円仏教信者だけでなく地域の児童センター、青少年相談センター、老人センターとも連携してより多くの人々に参加の機会を与えようとしている。次の感想文からも分かるように、ほとんどの参加者がとても肯定的な反応を示し、やりがいを感じるという[29]。

「今日は死の体験をした。死が何かを知るようになった。そして遺言状を書いた。いざ自分が死ぬと思うと、家族のことが頭に浮かんだ。それで涙がこぼれた。その後、真っ暗なところに入った。本当に怖かった。

（死の道を通り抜けて、明るいところに）着いたとき、みんなが、いや、みんなじゃなくて何人かの友達が私を迎えてくれた。（恐怖に耐えて）そこまでたどり着いた甲斐があった。本当に死んだら、きっとさびしいだろうと思った。本当に死にたくないと思った。それでも楽しい一日だった」（プログラムに参加したある子供の感想文）（図 16 を参照）

円仏教納骨堂のようなきちんとしたプログラムがあるわけではないが、聖公会が運営する納骨堂でも積極的な死の教育が行われている。ソウル市庁の近くに位置した聖公会ソウル聖堂は 1997 年、本堂の増築の際、地下に遺骨 500 余基を安置できる納骨堂「安息の家」を造成した。この聖堂は 1926 年に建てられた由緒ある建物で、大勢の人々が見学に訪れる。聖堂側は子供たちが聖堂の見学に来ると必ず納骨堂も見学させるという。それは、ソウルのど真ん中にある聖堂の納骨堂を見学させることで、子供たちに死は怖いものではないということを教えるためだという[30]。

一方、京畿道高陽市一山東区にある民営の C 納骨堂は火葬奨励キャンペーンに力を入れている。C 納骨堂はこれまで数回にわたって芸能人、スポーツ

図 16　死の体験プログラムの様子

選手、映画監督など有名人の火葬遺言誓約式を主催し、火葬と納骨のイメージアップを図ってきた。また、2009 年には、納骨堂内に献体者のための専用の安置室を作り、延世大学医学部に寄贈した。有名納骨堂である C 納骨堂に献体者のための安置室が新たに設けられたことで献体への認識がより広まるきっかけとなった。

そして、今はほとんどの納骨堂がホームページを利用して、死と葬送に関する情報を提供している。彼らが提供する情報は、火葬、納骨、祭祀や追悼儀式など納骨堂の利用に必要となる実質的な情報から、死と葬送に関する研究資料、報道資料、統計に至るまで膨大である。現在、韓国で実際に死の教育の多くの部分を担っているのは、このように葬送関連業者が提供するインターネット上の情報と言っても過言ではないかもしれない。民営納骨堂による火葬、献体の奨励や関連情報の提供などの活動の第一の目的が、仮に自社施設の広報にあるとしても、それらの活動が死の教育に繋がっていることは否定できないだろう。

3. 文化空間としての納骨堂

近年、大都市とその周辺部に建てられる納骨堂は、公園やホテル、ギャラリーを思わせるほど周辺施設と内部インテリアに気を配っている。屋外には様々な木と草花を植え、池や滝などを人工的に造成しているところも多い。利用者がお弁当を食べたり、ゆっくり休んだりすることができるように小亭、ベンチ、テーブルなどを設置し、彫刻や噴水などで公園のような雰囲気を演出している。屋内も採光と照明に細心の注意を払い、観葉植物や花、写真、絵画、書道作品、詩、金言などを入れた額縁や彫刻をいたるところに飾っている。従来の納骨施設では、付帯施設というと小さな売店くらいしかなかったが、現在は食堂、カフェ、子供の遊具など付帯施設の拡充にも力を入れている。それだけではない。民営・公営を問わず、文化芸術団体、市民団体と連携し、音楽会、写真展、美術展、詩画展、作文大会など様々な文化イベント、体験イベントを開催する納骨堂が多い。

納骨堂運営者側のこのような努力はすべて、納骨堂に対する従来の嫌悪感を払拭することに目的がある。最初のところで述べたように、90 年代前半まで韓国の納骨堂はそのほとんどが公営施設で、無縁者の遺骨を安置する陰鬱な場所として認識されていた。そのような悪いイメージを無くすために、運営者側は諸般の施設を衛生的、現代的に改善するとともに、より親近感のある文化空間のイメージを演出するために様々な工夫をしている。

その結果、今の納骨堂では、ソファに座って新聞を読んでいる老人、ベンチで昼寝をしている男性、カフェでコーヒーを飲みながらおしゃべりをしている女性たち、彫刻を背景に写真を撮っている家族、芝生で遊んでいる子供の姿が普通に見られるようになった。まるでどこかの公園を思わせるこのような姿は従来の納骨堂では想像もできなかったことである。(図 17 を参照)

図 17　近年の納骨堂の施設

それに加え、最近納骨堂の運営者たちがとくに力を注いでいるのが芸能人など有名人の遺骨の誘致である。それは有名人の遺骨の誘致が納骨堂のイメージアップと広報に大きく寄与するためである。現在、ソウル市周辺の民営納骨堂のほとんどが有名人の遺骨を安置し、それを大々的に宣伝している。

一例として、京畿道城南市盆唐区にあるS納骨堂の場合、1つの安置室を人気女優であった故チャン・ジニョンの追慕室[31]として改造した。追慕室には故人の骨壷、位牌のほかに、写真、プロフィール、服や靴、アクセサリー、ダイアリーなどの遺品、活動当時の写真と映像、出演作品のDVDと脚本、ファンの手紙と贈り物、訪問者のための訪問録などが備えられている。故人の遺族と知人、ファンは納骨堂側の積極的な支援の下、忌日と誕生日にここに集まり追悼式を行った。人気女優であったチャン・ジニョンの追慕室は、S納骨堂の利用者と故人の関係者だけでなく、数多くのファンと地域住民が訪れ、ちょっとした地域の名所になっている。2009年開館したばかりのS納骨堂はその年に亡くなったチャン・ジニョンの遺骨の誘致に成功したことでメディアに注目され、一躍有名納骨堂として脚光を浴びるようになった。

このように有名人の遺骨の安置は納骨堂のイメージと評判に直結するため、民営納骨堂の運営者たちは、有名人の死亡記事が出るとわずか数時間のうちに所属事務所や遺族に営業に出向き、誘致競争を繰り広げることも多いという[32]。(図18を参照)

図18　民営納骨堂に設けられた有名女優の追慕室

納骨堂運営者側の様々な工夫と努力によって、納骨堂が従来の陰鬱なイメージから脱皮し、運営者側が目指したような文化空間としての役割と機能をある程度有するようになったことは事実である。しかし、それが納骨堂の利用者や関係者だけでなく、地域住民を含めた一般の人々も気楽に訪れる公園のような本物の文化空間になれるまではまだずいぶん時間がかかりそうである。

終わりに

1990年代後半以降、韓国の葬送文化は、付いていけないほど猛烈なスピードで変化を遂げつつある。個々人はそのような変化のスピードに戸惑いを感じながらも、各自の状況に応じた葬祭と墓作りの方法を模索するために四苦八苦している。近年、大都市とその周辺部を中心に納骨堂が急速に広まりつつあるのも、そのような模索の結果として理解することができる。

本論文では、この納骨堂に注目し、「納骨堂」という新しい墓地での儀礼・追慕の形式の変化と、新たな死と生の空間の生成について、実際の事例を取り上げ、具体的に論じた。

これまで見てきたように、納骨堂は、都市部の新しい墓地として重要性を高めつつあるが、それでも埋葬を主体に築かれた従来の儒教的規範が完全に捨て去られたわけではなく、納骨堂の施設面での制約と利用条件に応じて多様な形に変えられつつ維持・実践されている。そして、様々な物品を使って安置壇を飾る、死者へのメッセージを書き残す、インターネットを使って墓参りをするなど、かつての埋葬墓地には見られなかった、納骨堂ならではの独自の儀礼・追慕の形式も作り出されている。また、納骨堂は儒教的規制が及びにくい場であるため、従来は儀礼・追慕の対象から除外されていた「非正常」な死に方をした死者も儀礼・追慕の対象にされるなど、従来の規範からの逸脱も見られる。

一方、儒教的規制が及びにくい、日常的な生活空間と物理的・心理的距離が近いといったような納骨堂の持つ長所によって、信仰の実践空間、死の教

育空間、文化空間など、新しい死と生の空間が納骨堂において生成されている。

現在、韓国における火葬後の遺骨処理方法には、大きく分けて 3 つの傾向が見られる。まずは、公営・民営の納骨堂に夫婦や個人の単位[33]で個別の安置壇を借りて遺骨を安置する傾向である。次に、既存の先山や私有地、公営・民営の公園墓地に家族・門中の単位の納骨墓を造成し、そこに遺骨を安置する傾向である。最後に、墓を作らず、山や川、海などに自然散骨するか、あるいは公営・民営の散骨施設に散骨する傾向である。

それでは、この中で現在、納骨堂が最も多く選ばれている理由は何だろうか。それは、納骨堂が従来の埋葬墓地と同様、「安置壇」という形で「墓」を造成し死者儀礼や死者とのコミュニケーションを可能にしたこと、またそうでありながらも埋葬墓地に比べて墓の購入や管理、墓へのアクセスが容易であることによると考えられる。ただしこの点では、家族・門中の単位で作られる納骨墓も同様である。だが従来の埋葬墓地や家族・門中を単位とする納骨墓は受け入れにくかった「非正常」な死の局面（早死、事故死、自死など）や「非正常」な家族の局面（離婚、非婚、移民など）までも受け入れられる個別的な墓の形態である点、そして、死者を表象し追慕する方法においてより具体的で多様な方法を取り入れられる点が、納骨堂ならではの独自の長所として支持を得ているのではないかと考えられる。

本田は 1980 年代末に韓国南西部のある農村で行われていた「サンイル」（墓の整備作業）の事例を分析した論文で、Freedman を引用して、「祖先崇拝」（ancestor worship）と「追慕・記念」（commemoration）が、死者に対する生者の働きかけのあり方の異なる 2 つの側面である点を指摘している。本田によれば、①前者が、親族集団の結束の要となるような祖先に対して、子孫が集団的（corporate）に義務として行うような、規範によって規定される構造化された奉仕である反面、②後者は、私的な思い出や記憶（memory）に残る死者に対して、生者が個人的かつ主体的に行う、多分に情緒的で必ずしも構造化されてはいないような追慕・記念の行為であるという[34]。先山に代表される従来の韓国の埋葬墓地と同様、近年増えつつある家族・門中の単位

の納骨墓も、①の「祖先崇拝」と②の「追慕・記念」の側面の両方を合わせ持っているといえよう。それに対し、納骨堂に見られる死者儀礼や追慕の行為では、①の「祖先崇拝」の側面は薄まりつつあり、むしろ②の「追慕・記念」の側面が非常に強くなっていると感じられる。つまり納骨堂の場合、集合的な祖先に対して「孝」や「祖先崇拝」などの儒教理念を実践する場よりも、「意志や感情を持つ人格として[35]」個別的で具体的な死者に対する個人的な思い出や記憶、愛着と追慕の感情を表す場としての意味の方がより強いと思われる。したがって、現在、韓国の都市部の納骨堂は、本田が1980年代末の韓国の農村における墓について述べた内容を少しだけ変えて、「死者の遺骨を安置し祀る場所であるのみならず、個別の死者を表象し記憶するための装置であり、時には死者の記念物となっている」といえるかもしれない。

現在、韓国における火葬後の遺骨処理方法で最も高い比率を占めているのは、火葬した遺骨を納骨堂に安置する方法であるが、最近徐々に増加しつつあるのが、墓を作らないか、あるいは最低限の標識だけを残す「自然葬」の方法である。

自然葬が増えつつある理由については、以下の要因が考えられる。第一に、自分の居住地域内に「嫌悪施設」を設置することに反対する地域住民との葛藤により、大都市やその周辺部に利用料の安い公営納骨堂を設置することが非常に困難である点。第二に、民営納骨堂を中心に納骨堂の施設が高級化するにつれ購入・管理の費用が上がり、経済的な負担として作用している点。第三に、民営納骨堂の場合、カプセルホテルのように利用者が入れ替わる施設ではないため、収益の持続的な創出には限界があり、定員に達した際に業者が放棄する可能性があり、永久的な管理について懸念がある点。最後に、環境問題の観点から考えた場合、将来、無縁集団墓地化する可能性のある納骨堂が果たして自然に親和的かという疑問が生じている点である。しかし、前述したように、人々が「死者の遺骨を安置し祀る場所であるのみならず、個別の死者を表象し記憶するための装置であり、時には死者の記念物」として納骨堂を求めていると考えるならば、墓を作らない、あるいは最低限の痕跡だけを残すことに留まる「自然葬」の増加に

は、本論で指摘した諸要因に留まらない、個々人のライフスタイルの変化、価値観の変化、死生観の変化など、様々な要因が作用しているように思われる。これに関してはさらなる検討が必要であり、今後の課題として残したい。

■ 参考文献

＜日本語文献＞

伊藤亜人他監修　2003 『（新訂増補）朝鮮を知る事典』、平凡社

高村竜平　2010 「韓国政府の墓地政策と葬法改革キャンペーン」、『国際宗教研究研究所ニュースレター』66、pp. 11-17

――― 2009 「葬法選択と墳墓からみた朝鮮の近代」、『韓国朝鮮の文化と社会』 (8)、韓国朝鮮文化研究会、pp. 50-83

田中悟　2011「現代韓国における葬墓文化の変容――納骨堂を中心に」、『大阪女学院短期大学紀要』40、pp. 19-36

丁ユリ　2008 「韓国の葬墓文化に関する研究――都市住民の葬法にみられる近年の変化を中心に」、東京大学大学院人文社会系研究科修士論文

中村八重　2001「現代韓国社会における火葬と「孝」の理念」、『アジア社会文化研究』2、アジア社会文化研究会、pp. 41-54

秀村研二　2007 「韓国社会における死をめぐる民俗文化の変容――火葬の増加と火葬場」、朝倉敏夫・岡田造樹編『グローバル化と韓国社会――その内と外』国立民族学博物館調査報告 69、pp. 31-41

本田洋　1993 「墓を媒介とした祖先の「追慕」――韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から」、『民族学研究』58 巻 2 号、日本文化人類学会、pp. 142-169

ロジャー・L. ジャネリ、任 敦姫　1993 『祖先祭祀と韓国社会』、金美栄、樋口淳訳、第一書房

＜韓国語文献＞

キム・シドク　2002 「家庭儀礼準則が現行喪礼に及ぼした影響」、『歴史民俗学』12、韓国歴史民俗学会、pp. 81-108

大韓主婦クラブ連合会編　1999 『葬墓文化に対する意識調査――火葬及び納骨施設、改

正葬墓法などについて』、大韓主婦クラブ連合会
保健福祉部　2010 『2010 保健福祉統計年報』
宋鉉東　2006 「韓国の死の儀礼に関する研究」、韓国学中央研究院　韓国学大学院宗教学科博士論文
チャン・チョルス　1984 『韓国伝統社会の冠婚葬祭』、韓国精神文化研究員編、高麗院
――― 1997 『韓国の冠婚葬祭』、集文堂
＜インターネット　ウェブサイト＞
http://www.ehaneul.go.kr　保健福祉部　葬事総合情報システム
http://www.mw.go.kr　保健福祉部
http://encykorea.aks.ac.kr　韓国民族文化大百科事典

■註

1　1990 年代後半以降の韓国における葬送の急激な変化については宋鉉東（2006）、秀村研二（2007）、高村竜平（2009、2010）などが参考になる。筆者も修士論文「韓国の葬墓文化に関する研究 ――都市住民の葬法にみられる近年の変化を中心に」（2008）において、変化をもたらした社会的な動きとして、①新たな言説の形成、②法律と制度の改変、③施設上の改善を指摘するとともに、遺族とのインタビュー内容に基づいて、個人のレベルでの葬法と墓地の選択と実践は、死者と遺族の経済的な状況、家族史、宗教、趣味、価値観、死に対する態度や準備程度、儀礼に対する知識程度など、様々な細かい要因が複合的に作用していることを示した。そして、このような変化がどうして 1990 年代の後半になって著しく現れるようになったのかについて分析を試み、①圧縮的な近代化過程を経験する中で伝統的な葬送儀礼に対する知識伝承が断絶し、儒教観念も弱化しつつあったという背景と、②変化の直接的な契機となった 2 つの大きな事件（1997 ～ 1998 年に韓国を襲った「IMF 経済危機」と、1998 年の夏の洪水によってソウル市と京畿道一帯の埋葬墓地が大量に流失した事件）、③変化に更なる追い討ちをかけた「火葬奨励キャンペーン」と「well-dying」・「eco-dying」という言説の普及を指摘した。

2　保健福祉部（2010）、p. 298。

3　「納骨堂」は建築物形態の納骨施設、「納骨墓」は墳墓形態の納骨施設、樹木葬は火葬した遺骨を粉（遺灰）にして樹木の下や周辺に埋める葬法である（「葬事などに関する法律」第 1 章 2 条の定義を参照）。海洋葬についてはまだ法律的な規定はないが、

海に浮標などの標識を設置しそこで散骨する葬法である。

4 保健福祉部の統計資料によると、2009 年の火葬件数 244,125 件のうち、44.7％（109,342 件）が遺骨を納骨堂に安置した。ソウル市、京畿道、仁川市などの首都圏では 82,266 件のうち 50％に当たる 41,194 件が納骨堂に安置した。（保健福祉部の葬送関連総合情報サイト http://www.ehaneul.go.kr/stat/portal/portal_05_1.jsp を参照）

5 本田洋（1993）、p.142。韓国における墓地の意味や機能については、本田の外にロジャー・L. ジャネリと任敦姫（1993）、中村八重（2001）も参考になる。

6 筆者は 2003 年から韓国の近年の葬送の変化に関心を持ってフィールドワークを重ねてきたが、本論文では主に 2005 年以降、納骨堂の普及・定着が著しいソウル特別市と京畿道という首都圏の事例を中心に分析を試みた。

7 忌日（命日）や元旦、秋夕（旧暦 8 月 15 日）、寒食・清明などの名節（伝統的な祝日）に祖先の墓を訪ね、祭祀と墓の手入れを行うこと。

8 年一度、父系親族集団の共同墓地である「先山」に集まり、5 代以上の祖先たちの墓を綺麗に手入れし、祭祀を行うこと。

9 埋葬のため棺を墓穴に下ろす儀式。

10 死体を埋め封墳を作ってから行う祭祀。封墳祭ともいう。

11 虞祭には、葬儀が終わった後、死者の霊魂が安らかに眠れるように行う祭祀で、葬儀の当日、家に戻って行う初虞祭、翌日に行う再虞祭、3 日目に墓で行う三虞祭がある。近年は初虞祭と再虞祭は省略することが多い。三虞祭は初めての墓参で、墓の状態を確認し、簡単な供物を供えて祭祀を行う。

12 脱喪（除喪）の時期について、朝鮮後期に刊行された『四礼便覧』では 2 周忌を、1969 年に制定された「家庭儀礼準側」では死後 100 日目を奨めていたが、現在は葬儀が終わってから当日の脱喪（当日脱喪）、三虞祭が終わってからの脱喪（三虞脱喪）、四十九日斎が終わってからの脱喪（四十九日斎脱喪）が多い。筆者の調査では、死者を火葬にした場合、とくに当日脱喪と三虞脱喪が多かった。脱喪の際の祭祀である脱喪祭も、自宅でなく納骨場所や散骨場所において、葬儀と三虞祭を終えた直後に行うことが多かった。

13 父系血縁による親族集団。

14 日本で使われている意味とは範囲が異なって、狭義では火葬した遺灰を樹木、草花、芝の下や周辺に埋める葬法（「葬事などの関する法律」第 1 章 2 条の定義）を、広義では散骨一般を意味する。

15 カトリック信徒によるボランティア組織。同じ教会に通う信徒（死者・遺族）のために葬儀の全過程をサポートする。

16 契約者に対し、家庭の冠婚葬祭に必要な一切の物品、人手、関連サービスを提供する会社。実際は主に葬祭業務に力を注いでいる。1982 年、日本の互助会からヒントを得て釜山に最初の相助会社が設立された。2000 年代に入ってからは雨後の筍のように増え、2010 年末現在、登録されている相助会社だけで 300 社、加入者数は 355 万人を上回っている。しかし、登録された 300 社のうち 167 社が資産より多い負債を背負っており、経営難で一方的に休業・廃業する零細会社も多いため、契約者の被害が相次いでいる。(2010 年 9 月 S 納骨堂の職員とのインタビューと 2011 年 7 月 10 日ハンギョレ新聞記事 http://www.hani.co.kr/arti/economy/economy_general/486665.html を参照)

17 現代の一般的な祭祀の順番は、供物を供え、香を焚き、拝礼をし、酒を献じ（酒は初・亜・終献の三献)、祝文を読む。祭祀の後では供物を下げて参加者一同で飲福（飲食）する。

18 納骨堂の普及初期、ソウル市が韓国人に親しみのある巨大な墳墓の形で作った納骨堂。

19 旧暦 8 月 15 日の秋夕に、新米と新穀で作り、一年の収穫に感謝し、祖先に供える餅。

20 この納骨堂では安置された故人を祀るために小さな寺院を建て、慶尚南道の有名な寺院から 3 人の僧侶に来てもらっている。朝夕に故人のための祈祷を捧げ、所定の費用を払えば四十九日斎や忌祭祀を執り行ってくれる。有名寺院が運営に直接携わっていないが、その名声を売りにしている。

21 嫁いだ娘はもう実家の人ではなく嫁ぎ先の人で、他人に他ならないということば。

22 閏年とは、太陽暦での閏日（2 月 29 日)、太陰暦での閏月（2 月）が余分に設けられた年のこと。韓国の言い伝えに、閏年は天地の神々が人間の監視を休む期間で、いかなる不敬な行動も罰を受けないというものがある。そのため閏年に移葬・改葬を行ったり、親の寿衣（死に装束）を用意したりすることが多い。

23 韓国では葬礼指導士、葬礼管理士、葬礼マネージャー、葬礼ディレクター、儀典官、喪礼士など様々な呼称で呼ばれている。2000 年代に日本の互助会をモデルにした相助会社が相次いで設立されるなか定着した呼称で、日本の「葬祭ディレクター」に由来するのではないかと思われる。

24 大韓主婦クラブ連合会のアンケート調査（1999）よる。 大韓主婦クラブ連合会、p. 61。

25 安置壇の前面のこの透明な板を、田中悟（2011）は「透明扉」と呼んでいる。

26 キム・シドク、2002、pp. 106-107。キム・シドクは、喪葬礼の意味と機能について、儀礼の過程を通じて死者の魂を祖先神として昇華させ、共同体の構成員の死という絶体絶命の危機を乗り越えられるようにすることと論じた。そして、現在、韓国の喪葬礼は、そのような本来の意味と機能を失い、最低限の形式だけを残した「死体処理の儀礼」に転落してしまったと指摘した。

27 2011 年 9 月 9 日、保健福祉部の報道資料「もう葬事文化は火葬へと傾いた！」を参照。

28 京畿道城南市盆唐区にある S 納骨堂でのインタビュー（2010 年 9 月）より。

29 円仏教納骨堂の責任者である聖職者へのインタビュー（2010 年 11 月）より。

30 聖公会ソウル聖堂の聖職者へのインタビュー（2010 年 9 月）より。

31 チャン・ジニョン（享年 36 歳）は韓国の人気女優で 2009 年に胃がんで亡くなった。チャン・ジニョンの追慕室は現在も S 納骨堂に残されているが、遺骨は父親によって 2011 年故人の先山に移葬され、近くにチャン・ジニョン記念館が建立された。

32 京畿道城南市盆唐区にある S 納骨堂の職員へのインタビュー（2010 年 9 月）より。

33 稀に、プロテスタント教会などの宗教集団、門中、家族の単位で納骨堂の分譲を希望する場合もある。

34 本田洋（1993）、p. 143。

35 本田洋（1993）、p. 157。

（ちょん・ゆり　東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究専攻博士課程）

The Study of Charnel Houses at Some Major Cities of Korea and Their Suburban Districts: The Change of the Manner of the Rite and Requiem and The Creation of a New Space for the Life and Death

Yuri Jung

There are largely two main cultures in a funeral method in Korea. The one is the burial culture developed from the middle period of Joseon. It has been firmly conserved to protect a worth tradition from the practical function of Confucian consciousness such as filial piety and ancestor worship. Distinguished from the burial culture, the cremation culture has been also practiced for unnatural deaths, those of accident, plague, war, suicide, or the death early in life, etc, but since it is generally recognized unwanted, cremated bone would be mostly treated to scatter on a mountain, or a river and sea suchlike water. It was, however, since the last of 1990s that the funeral culture has dramatically started to changed. The rate of cremation has rapidly grown up around Seoul, Pusan, suchlike the major cities of Korea, and the treatment of cremated bone, moreover, continues to be diversified in the method getting over scattering bone only. Among the methodical diversity of cremation culture the charnel house is the highest method in the going rate.

The charnel of Korea chiefly running by public management until the early of 1990 was known as like the damp and shady repository where the cremated has been deposited. It was not until the late 1999s that the government and local autonomous governments invested their enormous budge on the facilities of charnel house to popularize the cremation culture and remodel them in the aesthetically contemporary fashion. What's more, the transformation on the facilities of private-management charnel houses from permission to reporting system in 2001 started to get the large number of religious group and private manager to compete for

running the business of the charnel. The background as such was brought in the turn of the consciousness on the charnel, and especially in the growth rate of cremation is a rapid shift remarkable around the major cities and suburban districts. The charnel is now emerging as a new style of cemetery in place of the traditional burial.

The charnel houses built since the late of 1990s, irrespective of public or private management, have a distinctive difference in a various way. Regarding the aspect of their facility, for example, it comes to be reminded of a luxury hotel or art gallery, and a professional mortician or religious person gets always ready to conduct a ceremony in the houses. They are channeling their energies into the large number of media for advertizing and providing the information. The bereaved could decorate an altar with pictures or keepsake, flowers or ornaments, religious material, memo, etc in memory of the deceased, and frequently look in the charnel not far from their own home.

For those reason, the communal space of visitors occurs in the charnel, and would also bring them in the effect of grief-caring.

The traditional burial place has been located at the meaningful and memorial place where the bereaved could meet to communicated with and put filial piety into place to the deceased, and show off and strengthen their bond. With spreading a new style of cemetery surrounding the suburban districts of some major cities, the charnel houses come to get a more power than the traditional ones in a role and function while holding a role and function the traditional burial place performed.

This thesis pursued a study of the role and function of charnel house emerging as a new cemetery. By investigating actual cases of the charnel houses at some major cities of Korea and their suburban districts, it recognized its new role and function as six special place - 1) ritual place, 2) memorial for , or communal place with the dead, 3) grief-caring place, 4) cultural special place, 5) religious special place, 6) education place.

The traditional burial place has been understood to be not only the place buried and dedicated to the deceased but also the mechanism reminded and memorial for respective ancestors, and sometimes to be the monument of the ancestor as well (Honda 1993, 142). It has been, however, said that as an alternative of the traditional cemetery, the charnel house brings into a change to the meaning and function the burial place has been holding with coming into wide as a new style of cemetery in the area of cities.

This thesis would like to pursue a study of the process that the charnel house recently emerging as a new style of cemetery has changed in the manner of the rite and requiem by paying attention to its spreading into the major cities and their suburban districts in Korea. It would also like to show the point that a new space for the life and death is being created through the charnel. It would finally like to demonstrate how to change in the way of the meaning and function in accordance with its popularization.